

近年の日本における婚前同棲経験の関連要因

Correlates of Premarital Cohabitation Experience in Recent Japan

小島 宏 (早稲田大学)

Hiroshi KOJIMA (Waseda University)

kojima@waseda.jp

本報告では「第9回結婚・出産に関する調査，2016」の個票データにロジスティック回帰分析を適用し、近年の日本における婚前同棲経験の関連要因の分析を行った結果を示す。これは日本において20歳代後半の高学歴女性で同棲経験確率が高いことを見出した小島(2010)のアジア3カ国の2009年データの比較分析の延長線上にある。しかし、2016年調査では学歴に関する情報が利用できず、婚活に関する情報が豊富なため、人口学的要因に加え婚活の影響について検討することにした。

この調査では婚前同棲の有無を直接的に尋ねず、7種類の結婚関連イベントの順序を尋ねており、ほとんどの対象者は「親の挨拶・了解」、「入籍」、「同居」を経験しているが、同居の期間がわからないため、本研究では入籍の前にある2種類の同居を同棲として従属変数とした。同棲は「同居」が最初で「入籍」が2～7番目のもの、同棲は「同居」が最初で「親の挨拶・了解」が2番目で「入籍」が3～7番目のものとした。独立変数としては結婚年、再婚同士、夫婦年齢、夫婦年齢差、夫婦結婚年齢、居住地方、利用婚活手法、結婚のきっかけに関するダミー変数を用いた。分析対象は20-49歳の有配偶男女で「同居」と「入籍」の順序を回答した者に限定した(N=1816)。

結婚年別にみると、同棲の経験率は有配偶男性で1990年代から2015-16年にかけて16%前後で推移しているが、有配偶女性では2005-09年にかけて10%前後で推移した後、2015-16年に33%に達している。同棲の経験率は有配偶男性で1990年代の8%から徐々に増加し、2010年代に14%前後に達しているが、有配偶女性では1990年代の7%から2000年代の10%へと徐々に増加し、2010年代の18%前後へと急増する。このように男女間で婚前同棲の頻度が異なることから関連要因も異なる。

分析結果によれば、同棲経験には有配偶男性で妻年齢25-29歳、妻5-7歳年上、妻8歳以上年上、婚活として「独身の異性が多いところに行った」、「何もしたことはない」が正の効果をもつ。有配偶女性では2010年以降の結婚、年齢20-24歳、夫年齢25-29歳、夫5-7歳年下、居住地として北海道、東北、南関東が正の効果をもち、夫結婚年齢17-22歳、婚活として「親や親戚、上司などに異性の紹介を依頼した」が負の効果をもつ。

同棲経験には有配偶男性で妻5-7歳年上、婚活として「何もしたことはない」が正の効果をもち、結婚のきっかけとして「妊娠・出産」が負の効果をもつ。有配偶女性では2010年代の結婚、再婚同士、年齢20-24歳、夫5-7歳年下、居住地として北海道、東北、南関東、婚活として「独身の異性が多いところに行った」、「何もしたことはない」が正の効果をもち、夫結婚年齢17-22歳、婚活として「親や親戚、上司などに異性の紹介を依頼した」、「結婚のきっかけとして「妊娠・出産」が負の効果をもつ。

謝辞：〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから〔「第9回結婚・出産に関する調査，2016」(明治安田生活福祉研究所)〕の個票データの提供を受けました。

文献：小島宏(2010)「東アジアにおける同棲とその関連要因 学歴との関連を中心に」『人口問題研究』，第66巻第1号，pp.17-48.